



第77回日本連合教育会研究大会 長野大会報告

大会主題

「悠久の山河の如く 新たな時代を力強く
切り拓く 日本人の育成」



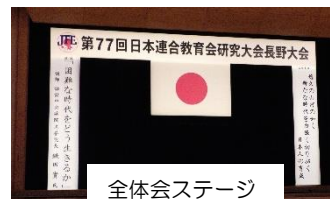
栃木県連合教育会参加者集合写真

大会概要

- 1 期日 令和8年8月20日(木)～21日(金)
- 2 会場 ホクト文化ホール(長野県長野市)他
- 3 参加者 約 1,100名(県外400名 県内700名)
※本県から 地区教育会会員 21名
栃木県連合教育会 3名 計 24名

4 大会内容

- 【1日目】理事会・青年教師の会
- 【2日目】開会式(挨拶・祝辞・表彰等)・
全体会(日連教会務報告 大会主題設定
の趣旨説明)
記念講演・アトラクション・分科会



全体会ステージ



日連教会長挨拶



文部科学省祝辞



長野県知事祝辞



長野市長祝辞



全体会会場内



信濃教育会オーケストラ・合唱団



第8分科会 栃木県提案発表

記念講演

講師 諏訪中央病院名誉院長 鎌田 実 氏

演題 「困難な時代をどう生きるか」

長年にわたり地域医療の第一人者として活躍してきた鎌田氏は、自身の生き立ちや学校生活、地域医療、被災地支援等の歩みを振り返りながら、教育の役割や子供との関わり方について語った。

経済的に厳しい家庭で育った鎌田氏にとって、教師の温かな配慮や言葉は、人生を支える力となった。一方で、厳しい現実を突きつける言葉もあり、それが努力する力や継続する力を引き出すきっかけとなったという。また、読書を通して世界を広げ、学び続けた経験から、教育とは知識や学習方法を教えるだけでなく、努力によって未来を切り拓く力や、自分の人生を自分で決める力を育む営みであると述べた。

地域医療や被災地支援の現場でも、鎌田氏が大切にしてきた問いがある。「自分が患者や介護者、被災者だったら何を必要とするか」。相手の立場に立つ姿勢が周囲の共感や協力を生み、取組を広げる力になるという。その経験を踏まえ、中学生や高校生を対象とした文化講演会等では、いじめなどで苦しむ友達を見て見ぬふりをせず、「私はあなたのことを分かっている」と伝える勇気が、一人の命を支えることにつながると呼び掛けてきた。

また、これからの時代を生きる子供たちについて、数値だけで可能性を捉えてはならないとし、「偏差値」よりも「変さ値」を大切にしたいという考えを示した。自分の「変さ」に気付き、それを大切にするとともに、他人の「変さ」にも敬意を払い、認め合うことが重要であるという。「変であること」は一つの魅力であり、人とは異なる考え方や新しい発想、独自の表現を生み出す力にもなる。一人一人の個性やよさ、可能性を認めることが、子供の自信や新たな挑戦につながると強調した。

最後に、子供を支える教師自身が心身の健康を保つことにも触れ、子供の個性と可能性を認め、自己決定を支え、若者の力を引き出すことが大人の役割であると述べ、講演を締めくくった。

土田 礼巳(下野市立南河内小中学校教頭)

	分科会名	協議題	提案教育会
1	教育課程	子どもが自らの可能性（自分らしさ）を発揮できる教育課程の実現	茨城県 信濃
2	学習指導	「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実による授業改善	呉市 長崎県 信濃
3	道德教育	他者と共によりよく生きるための道德性を養う道德教育の推進	香川県 信濃
4	人権教育	多様な価値観を認め合い、一人一人が尊重される人権教育の推進	東京都 信濃
5	特別支援教育	多様な教育的ニーズに対応した特別支援教育の推進	徳島県 信濃
6	健康・安全教育	子どもが主体的に学び、自ら気づく健康・安全教育の推進	山口県 信濃
7	生徒指導	子ども一人一人が大切にされていると実感できる生徒指導の推進	富山県 信濃
8	幼児教育	幼保小接続期における子ども理解と、「遊び」・「学び」のあり方	栃木県 信濃
9	地域と共に創る 防災教育	地域の状況を踏まえ、地域と共に創り上げる防災教育の推進	滋賀県 信濃
10	教育会のあり方 (シンポジウム)	社会の変化に伴う、職能団体としての教育会のあり方	信濃

栃木県連合教育会提案 第8分科会「幼児教育」

子ども達の主体性を尊重した保育の推進～生涯にわたるウェルビーイングの向上を目指して～

提案者 熊倉 仁（風と緑の認定こども園長）

1 はじめに

当園では、開設以来18年間にわたり、「子ども主体の保育」を実践してきた。子ども主体の保育とは、保育者が一方的に教えたり指示したりするのではなく、子ども自身が考え、選び、挑戦する経験を通して学びを深める保育である。子ども達の主体性を尊重した保育を通して非認知能力の育成を図り、ひいては生涯にわたるウェルビーイングの向上を目指している。



2 研究のねらい

当園では、子ども達は園庭で自然と触れ合ったり、室内で制作やごっこ遊びを楽しんだりするなど、自分の興味や関心に応じて活動を選択している。保育者は、子どもが主体的に行動できるよう環境を整え、必要に応じて支援する役割を担っている。本研究では、こうした保育の営みを通して、子どもの主体性がどのように育まれているのかを、園だより等に記載された子ども達の姿を基に、「環境構成」と「保育者の関わり」の視点から分析した。

3 研究の実際

（1）子どもの「したい」を引き出す環境構成

園庭では、オタマジャクシの観察や川づくり、季節ごとの自然遊びなどを通して、子ども達の探究心や創造性が育まれている。創造の森では、秘密基地づくりや木の実調べなどに夢中になり、友達と協力しながら試行錯誤を重ねることで、粘り強さや達成感を味わっている。また、室内コーナーでは、ブロック遊びや工作、ままごとなど、自ら遊びを選び継続して取り組む経験を通して、集中力や創造性を高めている。このように、多様な環境が子どもの「やってみたい」という気持ちを引き出し、主体的な活動を支えている。

（2）多様な力を育む保育者の関わり

① 自分で考える力を支える関わり

保育者はすぐに答えを与えるのではなく、子どもが自ら考える時間を大切にしている。例えば、遊びの中で困難に直面した際には、「どうしたらできそうかな」「別の方法はあるかな」と問いかけ、子ども自身が解決方法を見いだせるよう援助している。このような関わりは、主体性や探究心、粘り強さを育むことにつながっている。

② 仲間と考える力を支える関わり

子どもは友達との対話や協力の中で多くを学ぶ。玩具の取り合いや意見の対立が生じた際には、それぞれの思いを言葉で伝えられるよう支援し、相手の気持ちにも目を向けられるよう働きかけている。また、自然観察や共同制作の場面では、問いかけを通して子ども同士の話し合いを促し、協力して課題を解決できるよう支えている。こうした経験を通して、自律性や協働性、問題解決力が育まれている。

4 研究の成果と課題

（1）成果

主体性を尊重した保育は、豊かな環境構成と保育者の適切な関わりによって支えられていることが分かった。その結果、子ども達には意欲や粘り強さ、協働性、自己効力感といった非認知能力の育ちが見られた。これらは、子どもが自分らしく生き、他者と協力しながら社会の中で成長していくための重要な基盤になると考えられる。

（2）課題

幼児期の学びは、「やってみたい」「面白そう」という内発的な意欲を出発点としている。一方、小学校では学習目標を意識しながら学びを深めていく。しかし、主体性や協働性、思考力といった資質・能力の育ちは連続しており、幼児期の学びは小学校以降の学びの基盤となる。今後も幼保小の連携を深めながら、子ども達の育ちと学びを切れ目なく支え、一人ひとりのウェルビーイングの実現につながる保育を推進していきたい。

青年教師の会 共に学ばん！！

～子どもの主体性を育み、教師が主体的に学ぶために私たちにできることを協議しよう～

森山 貴史（宇都宮市立横川中央小学校教諭）

青年教師の会では、「子どもを中心とした授業づくり」「ICT活用」「教師自身の主体性と働き方」「学級経営」のテーマ毎のグループに分かれ、日々の実践について語り合った。活発な雰囲気でも互いの実践について検討し合う姿は、まさに青年教師の会の合い言葉、「共に学ばん！！」を象徴するものであった。

日本全国に、教育に対する熱い思いと高い志をもつ仲間がいることを実感し、明日からの実践に、主体的な一歩を踏み出す勇気を受け取ることのできる貴重な会となった。

第1分科会 教育課程

子どもが自らの可能性（自分らしさ）を発揮できる教育課程の実現

小荷田 一浩（野木町立野木中学校教頭）

本分科会では、2つの提案発表並びに研究協議が行われた。

茨城県教育会からは「学校運営の工夫」をテーマに、ミドルリーダーを活用した組織づくりと1on1ミーティングの実践が紹介された。

信濃教育会からは「社会に開かれた教育課程の編成と取組」をテーマに、総合的な学習の時間に取り組んだ地域人材を活用した半端材による物づくり実践が発表された。

研究協議では、「子どもの主体性を支える教育課程を学校の仕組みとして持続させるには何が必要か？」を協議議題に活発な意見交換がなされた。教師、子ども、地域が自分らしさを発揮できる環境をどのようにデザインするかについて学ぶ機会となった。

第2分科会 学習指導

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実による授業改善

加藤 裕史（宇都宮市立平石中央小学校副校長）

本分科会では、3つの提案発表並びに研究協議が行われた。

呉市教育会からは、「筋道立てて考え、自ら表現する児童生徒の育成」というテーマで、長崎県教育会からは、「自ら学び方を自己決定し、学びを高めていく子どもたちの育成」というテーマで、信濃教育会からは、「友や教師と関わりながら学びを深める子どもの育成をめざして」というテーマで、それぞれの実践が紹介された。

グループ協議では、「子どもが自己調整しながら学習を進めていくことができる指導の工夫」について意見交換がされた。

第3分科会 道德教育

他者と共によりよく生きるための道德性を養う道德教育の推進

今平 千歳（高根沢町立北小学校教頭）

本分科会では、2つの提案発表、並びに協議が行われた。

香川教育会からは、対話を軸とした学習基盤を確立させることで、主体的に学び続ける力の育成を目指した取組が紹介された。

信濃教育会からは、道德科の授業で学んだ価値を、他教科や日常生活の中で「実感」することができるようにするための取組が紹介された。

研究協議では、学びを「心情」のみで終わらせず、「道德的实践」につなぐことの重要性を再確認することができ、有意義な研修となった。

第4分科会 人権教育

多様な価値観を認め合い、一人一人が尊重される人権教育の推進

石川 佳子（佐野市立石塚小学校教諭）

東京都教育会から「自他を尊重し、互いを認め合う生徒の育成」において、当事者意識をもち、相手の立場を考えて学習活動に取り組めるようになった成果が示された。

信濃教育会から「多様な価値観を認め合い、一人一人が尊重される人権教育の推進」において、事実に基づき「知ろうとする努力」は、異なる背景をもつ人々を深く洞察する姿勢を育むことが発表された。

研究協議は、「支援と指導の工夫」と「教育活動全般を通して」の視点で行い、実態・実情から考えていくことの大切さを共有した。

第5分科会 特別支援教育

多様な教育的ニーズに対応した特別支援教育の推進

高橋 徹（那須烏山市立烏山中学校教頭）

本分科会では、2つの提案発表並びに協議が行われた。

徳島県教育会からは、特別支援学級を中心に取り組んだ「ミライ創造学習」の実践が紹介された。実社会での成功体験が、子どもの主体的な行動につながっている点が印象的であった。また、信濃教育会からは、UD・UDLを踏まえた授業実践が紹介された。ルーブリックの活用やスモールステップ学習等、子どもが見通しをもって取り組めるための工夫があった。

協議では、2つの提案発表を踏まえるとともに、テーマに関連した2つの視点について意見交換を行った。

第6分科会 健康・安全教育

子どもが主体的に学び、自ら気づく健康・安全教育の推進

荒井 利之（芳賀町立芳賀北小学校長）

本分科会では、2つの提案発表及び協議が行われた。

山口県教育会は、「子どもが主体的に学び、自ら気づく健康・安全教育の推進」、信濃教育会は、「一人一人が主体的に取り組む健康づくりを目指して～健康を守る意識から、つくる意識へ～」をテーマに取組を報告した。

グループ協議では、研究協議の視点に基づき、主体的な学びの工夫や共有、地域連携など、各校の現状や成果、課題について活発な意見交換が行われ、有意義な研修となった。

第7分科会 生徒指導

子ども一人一人が大切にされていると実感できる生徒指導の推進

根本 一明（塩谷町立塩谷中学校長）

本分科会では、2つの提案発表が行われた。富山県教育会からは「不登校児童の早期発見・早期対応を促進する不登校支援ガイドの開発とその効果について」の発表があった。不登校対策における成果が示された。信濃教育会からは、「生徒理解を基盤としたつながりあう支援体制を目指して」といったテーマで、養護教諭としての取組と生徒指導の組織的対応の成果が示された。

研究協議では「生徒理解」と「連携」という2つの視点で意見交換が行われ、有意義な研修となった。

第8分科会 幼児教育

幼保小接続期における子ども理解と、「遊び」・「学び」のあり方

大登 英樹（さくら市立喜連川小学校長）

本分科会では、2つの提案発表が行われた。

栃木県連合教育会からは「子ども達の主体性を尊重した保育の推進」をテーマに、環境構成と保育者の関わりが相互に機能した主体性を尊重した保育について発表がなされた。

信濃教育会からは「園小接続期における子ども理解と遊び・学びのあり方」をテーマに、園での豊かな遊びを入学後の主体的な学びにつなぐ取り組みが発表された。

研究協議では、子どもの主体性を大切にしたい遊び・学びの充実に向けた環境の構成について話し合いがなされた。

第9分科会 地域と共に創る防災教育

地域の状況を踏まえ、地域と共に創り上げる防災教育の推進

大島 徳彦（那須町立那須中学校教頭）

滋賀県教育会からは、生徒主体の実行委員会が企画する防災集会や避難所体験等を通し、地域との信頼関係を深め主体性を高めた実践が報告された。信濃教育会からは、地域活動の日や連携訓練での支え合いマップ活用、資機材体験等を通し、当事者意識や実践力を育む取組が発表された。

2つの発表をもとに、子どもが自らの命を守ることができるため、地域連携による防災教育について意見交換を行った。各校の実践を通し、地域と協働して進める防災学習の重要性が深く共有された。

第10分科会 教育会のあり方

社会の変化に伴う、職能団体としての教育会のあり方

栗原 武夫（栃木県連合教育会常務理事）

本分科会では、シンポジウム形式で協議が行われ、栃木県連合教育会高橋利和会長がシンポジストの一人として参加した。

信濃教育会から『これからの教育会のあり方～「学び水脈」×「やりたい！を実現＝シン・教育会～」というテーマで、職能団体である教育会が直面している会員減少という課題に対し、教育会の存在意義を再認識し今後も学び続ける仲間を支えていくためのあり方について、2つの郡市教育会の地域の実情に基づく組織作りや事業運営の取組の実践が発表された。「シン・教育会」の3つの提言として、「①当たり前の価値を問い直す、②ゆるやかにつながる、③教育会をひらく」が示された。



シンポジストを務める高橋会長

〈連合教育会ホームページ〉



編集後記

長野大会に参加された会員の皆様、分科会において提案発表された熊倉園長先生には、大変お世話になりました。また、実りある大会を開催いただいた信濃教育会の皆様のご労苦に敬意を表します。長野県のお土産を何にしたらよいか地元の人に聞いたところ、「七味唐辛子」を推す声が多くありました。確かにそば屋の紹介で見たメニューには、だし汁ではなく、そばに「七味」がかかっていました。（K.K）